

野生動物との格闘記

ハクビシン&ニホンザル

松平 忠志 (応化会)

このホームページに“ハクビシン”についての拙文を載せて貰ってから、既に13年も経った。あの時、ハクビシンは珍客だった。(2008.9.1)

我が家の小さな庭には、まずくて、“日よけ”にしかないブドウ棚があった。このまずいブドウを、夜中にこっそりとハクビシンがやってきて、少しばかり食べて行くのだ。沢山食べてくれれば、ゴミ処分の手間も省けるのだが。あの時の珍客は実に控えめだった。

やっとハクビシンの写真が撮れたので、本ホームページに掲載してもらった。地元の地方紙にも知らせたら、“住宅地に珍客”として掲載された。

その後、珍客は、突然、難敵に豹変した。以下、多少、長たらしい文章にはなるがご容赦を。

前編(ハクビシンは珍客)

私は40年ほど前に、築後10年の中古住宅を買って、一家5人で住み着いた(今は私のひとり暮らしだ)。このブドウの木は前の住人が植えたもので、実はなるが、まずくて食べたものではなかったが、切るのも嫌だった。この木は丈夫で、毎年、枝を切り詰めてはゴミに出し、沢山の実はゴミに出した。まだ若かった私にとっては、何の負担でもなかった。

その後、「巨峰の苗」を手に入れた。まだ孫も小さかったので、“来年はブド

ウ狩り“ をさせてやろうという、無謀な皮算用だった。苗は順調に育ったが、何年経っても実はならなかった。

早速、古くて太いブドウの木に、“巨峰の枝”を接ぎ木することを試みた。うまく行けば、2、3年で大豊作だ、と思ったがそんな簡単なものではなかった。色々条件を変えて試してみたが、全部、失敗だった。

すっかり諦めていた頃に、“ハクビシン”がやって来たのだ。

この時のハクビシンは珍客と言うよりも、賓客だった。ハクビシンのために、少しでも美味しくしたいと考えて、自己流の枝切り、摘果などをやったが、マズいものはマズかった。ハクビシンの来訪もまた、気まぐれだった。(2008年)

後編(ハクビシンは天敵)

更に何年か経ったころ、突然、2房の“巨峰”が稔ったのだ。(20014年)

房は貧弱だが、粒は大きく、まぎれもなく“巨峰”だった。苗を買ってから、10数年経っていた。

一粒取っては味見をしてみたが、日に日に熟れて行き、味も良さそうだ。しかし…

私は若い頃は、味覚や嗅覚に自信があったが、最近、すっかり鈍くなったので、孫息子に試食してもらおうと、「これはうまいよ。スーパーで買ったものより断然うまいよ。」と言う。孫には、もぎたての新鮮さをはっきりわかるようだ。以降、彼は、私の巨峰の品質検定人になった。

苗が良かったからか、もぎたてだからか、味は安定して“うまい”。上出来だ。

ところで、ひと房が熟れて、明日は収穫しよう、と思ったら、その夜中にハクビシンが来た。翌朝、その房は、一粒残さず食べられてしまった。ヒトが食べるのと同じように、フクロだけが落ちていた。残りの房も、明日は収穫、と思った日の夜に食われていた。

以後、以前の珍客は天敵になった。ヒトにとってうまいブドウは、ハクビシンにもうまいのだ。

それからの数年は、ハクビシン対策に明け暮れることになった。

さて、接ぎ木については、既にトライして失敗していたが、少しでも多く収穫したい。そこで今回は、2本のブドウの癒合を試みた。今までの失敗の経験をフルに活かしたので、1回のトライで癒合に成功した。

そのポイントは、両方の木について、前年に伸びた枝の中から、できる限り太くて勢いの良い枝を選ぶ。新芽が勢いよく伸び始めた頃、節と節を合わせて、2本を平行に。接触部分の皮を剥き、やや深く削り、傷口を密着させて、ひもで縛る。節と節を合わせるのがミソだ。

そして直射日光と雨水が当たらないように、固定する。

つまり、元気な枝を、元気に伸びる時期に、癒合しやすいように皮を剥いて、節の部分同士を密着させて、局所を、風通しの良い冷暗所環境に保つのだ。結果は、大成功だった。

棚も拡張した。以前は約3㎡だったが、約10㎡に広げた。棚の仮想能力は、日照的には、10kg(400g×25房)になった。

癒合せせた年は、触らないようにし、翌年からは、古い方の枝は大胆に切り詰めて、巨峰に養分が行くように剪定した。巨峰は急成長し、順調に収量が増えて行った。

一方、ハクビシンは、難敵だった。パラゾールの匂いが嫌いだとの情報を貰ったが、効果は一日だけだった。

赤外線を感知して、発光する装置。同じく超音波を発する装置。いずれも効果は一晩だけだった。

唐辛子の臭気成分もハクビシン撃退用に売られていた。一か月間は効くと書かれていたが、効果は一晩だけだった。

どの方法も、一回はショックを受けて逃げるが、直ぐに慣れてしまうようだ。野生動物除けのアミでも包んだが、緩い所を探したり、鼻を突っ込んだりで、効果はなかった。

脅しや防御だけではダメで、攻撃の要素が必要なのだろう。イタイ思いをさせる必要があると考えた。

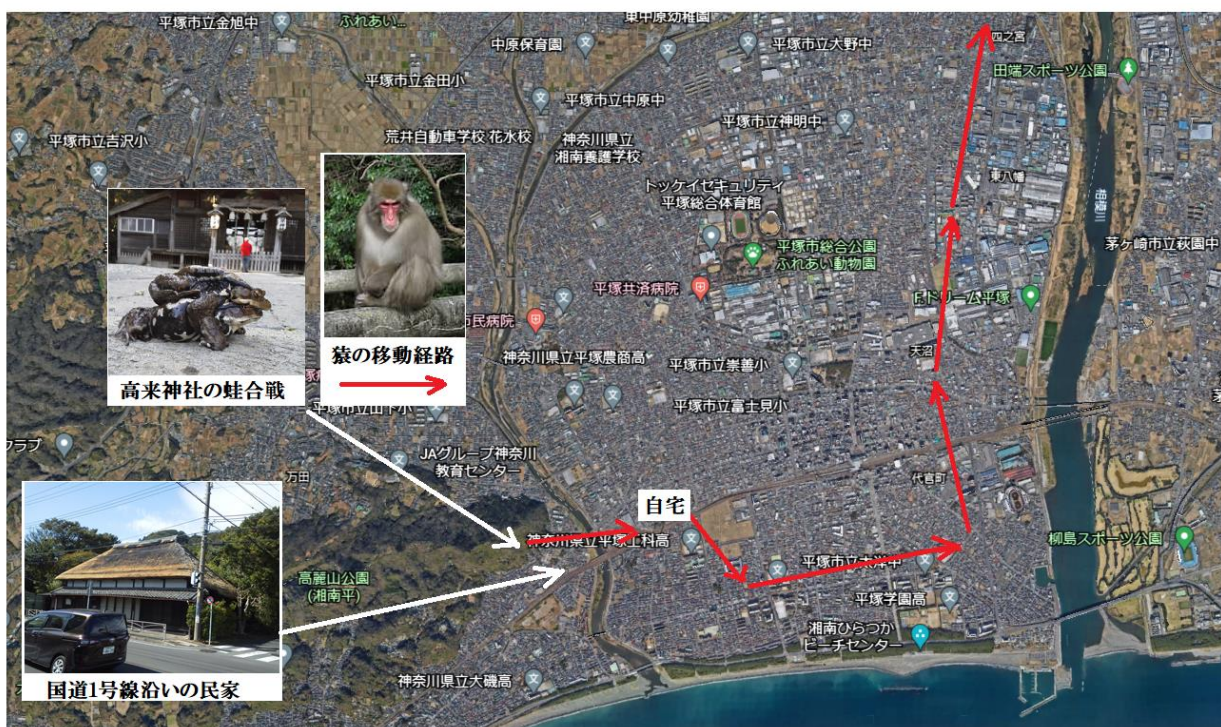
そこで空きPETボトルを利用した容器に収め、容器を開けようとする、針がささるよう、画鋸を逆向きに張り付けた。容器を開けようとする、画鋸の針がささるという仕掛けだ。この“PET&画鋸”方式によりハクビシンの被害は、ほぼなくなった。(2018~2020)

しかし、敵もさるもの、画鋸の少ない所とか、ホッチキスなどでの止め方が緩い箇所があると、そこからこじ開けるようになった。容器の改善とハクビシンの攻撃はシーソーゲームだった。

来年はこの“PET&画鋏”方式について、更なる改良を予定している。“PET
&画鋏&外袋”方式である。



自宅の巨峰がサルに食われ、全滅状態に(7.22-23)。直前に大磯高来神社。



ところが、7月下旬、偶々、2泊の旅行をしたところ、その留守にブドウは壊滅的な被害を受けてしまった。今年は豊作で、20房ほどの収穫を見込んでいたのだが、15房ほどが消えてしまった。被害の状況からみて、明らかにハクビシンではない。食べた証拠になるべきフクロが少ししかないのだ。

丁度その頃、近所でサルが出没しているとの情報があった。

サルなら、大きなホホフクロに入れて運べる。手でも運べる。落ち着いたところで、ゆっくりと食べたのだろう。

ところで、自宅から花水橋を渡ったところに、古刹、高来神社がある。毎日、ウォーキングして参拝しているが、顔なじみの神官から“サル情報”が入った。この神社付近には、2、3年置きにサルが出没しているが、今年は久しぶりに来て、プラムを少し食べて行ったそうだ。

その次に、花水川を越えて、我が家のブドウを壊滅させたことは確実だ。

その後のサルの出沒記録は、地元の情報紙に記載されていた。我が家のブドウが、このサルにやられたことは明らかだ。

来年は、電気柵を設置するつもりだ。

ブドウ栽培は、年寄りに適したワークだと思う。

なお“巨峰”は4倍体で、高級ブドウの元祖的な品種だという。成長は早いですが、自家受粉しにくく(ハナブルイ)、当初は栽培が非常に難しかったと言う。その後、ジベレリン処理による“種無し法”が完成して、ハナブルイ問題が解決し、栽培が容易になって普及したと言う。

満開から3日以内にジベレリン処理すると、受粉していないのに、受粉したとの偽情報(植物ホルモン?)が誘発される。雌蕊が受粉したとのフェイクニュースが発出されるらしい。

これにより 100%、すべての雌蕊が膨らんでゆくのだ。そのままにしておくと、小粒になり、完熟しなくなる。そのため摘粒作業が極めて重要である。……大雑把に言って、花の90%を摘み取り、残すのは10%以下だ。

他にも、施肥、剪定、殺虫など、仕事は多く、それぞれにノウハウがある。しかし今では、YouTube を探すだけで、親切な動画をみることができる。書物では、微妙なところ、細かいことは分からず、隔靴搔痒の感があるが、YouTube はありがたい。

複数の果樹園の YouTube を見れば、果樹園ごとの経営哲学(大量生産指向か、贈答用指向か)まで判る。親切な農業技術者に感謝、感謝だ。

補足

今年は緑色のシャインマスカットが人気だ。値段は巨峰の2~3倍もするが、食べてみると確かに、うまい。色々な特徴があって、農家が巨峰からシャインマスカットに切り替えているらしい。

ネットで苗を売っていたので、1本 取り寄せた。

来年は満90歳だが、収穫まで見届けたいものだ。……かなり過大な期待ですが。

もし長生きした場合は、何かハプニングのきっかけになるだろう。

最近、体力、気力の低下で悩んでいる。特に、動き始めが億劫なのだ。アドレナリンやドーパミンが出ないのだろう。

ところが偶に何か面白そうなハプニングがきっかけで、急に元気が出ることもある。

自分の意志で気力を出すことは無理なのに、何かのハプニングでスイッチが入るのだ。これは明らかに老化現象の一つだ。

シャインマスカットの苗に、そんなハプニングを託している次第だ。

参考

ブドウのことを知りたければ、以下をクリックしてください。良くわかります。

[ぶどうを知る \(okayamakajyu.com\)](http://okayamakajyu.com)